寮の姿も変われども 喪失われゆく大自然 北の都は開発かれてきた。みやこのは

恵迪の名は永遠に

残雪溶けて東風吹かば

湿原に咲く花影なしいががんだっぱん 川流絶えて水は涸れ 大地は黒々と輝けど

短き盛夏の夕陽を浴びて 昔日の影すでになく 緑葉さわぐ楡の森りょくよう

ただ寥々と佇立まう

早雪までのこの眺望 秋風にうたれて舞う落葉がませる。 蒼白く映ゆ原始森の木々 ままじろ は も も り きぎ 虚空逍遥う月の影

樹影に黒き鴉鳥 白雪烈風に舞い上がりはくせつかぜまります。 疎々たる杜を吹き抜けぬ

寂莫として声もなし

心の痛みつのるかな 迷夢の夜は未だ明けず 行方も知れぬ朔風にゆくえ の鐘鳴らせども

> 仮寝の夢を貪りているない。これに旅してこの宿にまた。 てこの宿に

過ぎし歳月早二年 懐かしさ満つこの団居